

三島 日本大学 同窓会々報

第 5 号

昭和50年7月30日
静岡県三島市文教町2
日本大学三島同窓会発行



三島学園から富士をのぞむ

ついに会員四三、九五七名 幹事会で報告

昭和五十年日本大学三島同窓会幹事会は七月二日(水)十八時より日本大学文学部(三島)本館小会議室において開催された。

まず、急な出張で出席できなかった種房繁会長に代り奥田吉郎副会長の挨拶の後、瀬川一男事務局長より幹事選出の経過について説明が行なわれた。引続いて馬場康夫氏を議長に、遠藤逸雄氏を副議長に選び議事にはいり、次の事項を可決承認した。

- 一、昭和四十九年度事業報告
- 一、昭和四十九年度決算報告
- 一、昭和五十年年度事業について
- 一、昭和五十年年度予算について
- (以上6頁参照)
- 一、常任幹事選出について

(3頁役員名簿参照)
議事終了後、三島学園開設八十年事業について奥田副会長より報告が行なわれ、続いて本会の会員数について瀬川事務局長より報告が行なわれた。会員は現在予科関係一、九五二名、教養課程関係三三、八一二名、短大関係八、一九三名、合計四三、九五七名となっている。

(関係記事4頁参照)
總會を盛大に開催
役員改選など

同窓会昭和四十九年度總會並びに懇親会は、母校日本大学三島大祭第三日目の十一月三日、会員一五六名を集めて三島学園記念館で盛大に開催された。
總會は午後四時から行なわれ、

種房会長の挨拶の後、奥田氏を議長に選び議事にはいり、次の事項が報告、承認された。

- 一、前年度事業報告について
- 一、前年度決算報告について
- 一、本年度事業計画について
- 一、本年度予算案について
- (以上会報第四号参照)

一、役員改選について
会長・副会長・事務局長については、いずれも万場一致で次の三氏を再選した。なお、幹事の選出は三氏に一任した。

会 長 種房 繁氏
副会長 奥田 吉郎氏
事務局長 瀬川 一男氏
また、会計監査は次の二氏が選出された。

会計監査 持田 光雄氏
中島みほ子氏
一、名簿作成方法について
小委員会の結論を報告
(6頁参照)

二期同期会開かれる

三島教養部二期(予科昭和二十三年入学を含む)同期会は、六月二十八日(土)午後五時三十分より東京丸の内、国際ビル二階の経済同友会ファミリークラブで開催された。恩師の安藤・玉津・斎藤・沼尻の四先生を迎え、会員は九州よりの参加五名を含む、全国より六十八名が集まり、二十五年目の集いに話題はつきずようやく九時過ぎに閉会した。

三島学園初期の学生であった皆さんを、この学園から送り出して以来、まもなく三十年になります。つくづく年月の速さを感じさせられます。

旧制大学予科や、新制大学教養部初期の頃に、この三島学園に選ばれた学生諸氏も既に四十才の年代にある筈です。

その皆さんは、第二次大戦直後世界の国々が荒廃窮乏の底から徐々に復興しつつあった時期に、学業を終えて社会に出られたのであります。

敗戦国と言う逆境にありながら

も、驚異的な経済成長の路線を歩みつつあったわが国の当時の各界各分野で、若いエネルギー

ギーンと意欲に溢れた皆さんは、着々と実績を積み成果をあげて、時代の推進力となって活躍し、今日では更に新たな次の世代への指針ともなるべき責任ある地位におられるのです。

当時の皆さんがこの学園を去るときに植樹した記念の樹々も、今日では皆さんの生成発展を想わせるようにたくましく生長して、「希望の森」や「思索の森」の緑をますます深くしております。

三島の学園は、旧制の予科から教養部となり、ただ今では文理学

部三島校舎として文系四学部の教養課程がおかれて居りますが、その間に併設された短期大学の各科（文科・商経科・家政科・工科）を合せて累計すると、この三十年の間に三島学園に学んだ学生の総数は、今年三月で四三、九五七名と言う数字になります。

私は、この数多くの三島学園出身者、即ち各自めいめいがその夢多き青春の思い出の頁のうちに、三島での学園生活と言う共通の一頁をもつ人たちが、現在日本全国各地にあって、それぞれの道に営

々と努力を重ね活動しておられることを想うとき、これら同窓諸氏の将来の大成を期待すると共に、その自愛と健闘を祈るばかりです。



三十年雑感

吉原 秀夫
(事務局次長)

の間に受け継がれて、一つの学風を成していることによると言えます。

わが三島学園はその教育組織、教育内容の充実と整備に不断の努力を続けてまいりましたが、一方では施設、設備の拡充近代化を進めております。初期の頃の思い出多い木造校舎もすべて取られ、新しい建物に改まり学園の雰囲気は一変しました。教室など一般授業に使用される三階建又は四階建のものが一〇棟、体育関係のもの四棟等総数二〇棟に及ぶ白亜の校舎が立ち並び並ぶキャンパスになりました。

又校舎敷地外にも土地や施設の整備拡張が行なわれ、第二校地の取得、学生生徒寮の施設と共に、厚生施設として山中湖畔に「月見丘寮」、西伊豆海岸に「セミナーハウス」が完成し学園の生活をより楽しく思い出さるものにしております。

暖房施設の整った明るい快適な校舎では、かつて暗い木造校舎の学生委員室で炭火を囲んだことなど昔ばなしの観があります。

同窓生の皆さんには、何かの機会にこの学園をお訪ね頂き、後輩諸君の学園生活、学園の現況などは是非ともご覧頂きたいと思っております。

一般に大学に対する世間の評価は、その校友あるいは同窓生の社会的評価に左右されると言われておりますが、よき同窓生である皆さんのおかげでわが日本大学三島学園の存在も全国的に定評化しております。それは人間的教養教育を主幹としたこの学園のあり方が三十年來の伝統として教職員学生



青春への追想

米内 国夫

て本当に幸でした。

「富士山」と「湧き水の流れ」
そうして「白線帽の学生」で象徴された三島の街。そこには戦争によって歪められた精神薄弱児であり、体は将に栄養失調障害をおこしつつある若者でもあり、又中学での志願兵隊・勤労動員、且又四年強制卒業の特別学級と言うアクシデント続きの問題児の入学のせいか、異常な程の知識欲に燃え乍らも時代に対する反抗、又鉄火の如き友情は、時代を背景として生れながらも常につきまとう不安、不信となり、やがては自己の生活を否定し、生きさへも断ちたくな

るような誘惑に負けまいとして蜜声を張りあげて歩いた意気込み、その毎日毎日は重苦しいような虚無感を折りまぜた黒マントの学生でした。
受験は東京でやり乍ら入学は三島と言う事に不満であった私達は東京校舎へ帰校運動のノロシをあげた時、当時寮のリーダーとして各教室を弁舌して廻った私自身その帰校が許されるようになると、いつしか私の心の中には三島生活に離れがたき愛着を覚えるようになり、願意してその儘とどまり寮の自治委員となり、賭博や寮費をうして、米不足、大根の買付、金のやり繰りの二年近い寮生活、又全国の友達との交流も出来、私の現在会社設立から運営に如何に勇氣と自信と与えてくれたか今考え

又一年1/4世紀を経て思いに思い続けた三島の地で、当時の先生方を囲み初の同窓会を料亭「呉竹」で開きましたところ、約百名近い出席者はまだ伸ばし始めた黒髪か、今薄肌を光をさす友となり顔を暫く見あってから、「よおー」といつしか学生口調に戻り、兵舎が校舎にかわり空腹によりすべてが質礼にかわり、今日買った本がすぐ古本屋の陳列にあったりで、次から次に想い出が走馬燈のように浮かび、楽しい中の時間はあつと言ふ間に過ぎ去り次会を約して別れた。今年の年賀状をみると早く開いてくれるようにとの催促が多いようです。私は学生生活の半ばに「太宰治」に心酔し、答案用紙に「ギロチンギロチンシュラシュラシュ」なんて書きながら出席時間の足りない毎年留年候補のなまけもの学生でしたが、どうして同窓会の世話役を引受けたのか、名簿を書き乍らこれも何かの因果関係だろうと考えつつ同窓の住所をたどって居りますが、時折友人の死が知らされる度び、私自身の中のものか死んだことのように思えてならないのです。
こうして回想する時、あの三年間の三島生活が自分の人生の青春だったと思ひこんでいるのは、あながち私ばかりではないだろうと思ひます。(昭和21〜23 在学)

役員選出なる

役員の選出は総会において行なわれることになっているが、昭和四十九年度総会において、会長、副会長、事務局長の三役と会計監査を選出し、幹事の選出は三役に一任した。会長より各期、各科にできる限り諮問し、その結果会長より次の各氏に委嘱することになった。

役員一覧

会長 種房 繁 (22・24)
副会長 奥田 吉郎 (23・25)
事務局長 瀬川 一男 (23・25)
会計担当 (常任幹事)
石川 貞夫 (28・29)
中島みほ子 (41・42)
会計監査 持田 光雄 (31・32)

幹事

氏名の上の○印は常任幹事
△印は事務局担当幹事

高田 日出太郎 (21)
馬場 康夫 (21)
中野 繁 (21・23)
石川 三雄 (21・23)
小野 真一 (21・23)

米内 国夫 (21・23)
西村 満男 (21・23)
滝川 昇 (22・23)
秋山 正幸 (22・24)
西村 美枝子 (22・24)
中浜 卓弥 (22・24)
北條 晃 (22・24)
長田 涉 (22・24)
中山 茂 (22・24)
中山 信行 (23・25)
木村 幸夫 (23・25)
勝俣 敞 (23・25)
杉山 吉彦 (23・25)
柳下 孝子 (23・25)
芦澤 克治 (24・25)
尾朝 豊春 (25・26)
葛巻 一男 (25・26)
小林 貞美 (25・26)
石山 進 (25・26)
白石 義仁 (25・26)
宮澤 主計 (25・26)
宮崎 茂樹 (25・26)
吉田 敏雄 (26・27)
渡辺 勝一 (26・27)
辻 省二 (26・27)
井川 一見 (26・27)
鈴木 邦良 (26・27)
浅原 好胤 (26・27)
遠藤 逸雄 (26・27)

杉山 一明 (26・27)
今関 邦彦 (26・27)
東 賞平 (26・27)
佐藤 力男 (27・28)
宮澤 基人 (27・28)
鈴木 実稔 (27・28)
上野 実 (27・28)
見上 勇逸 (27・28)
関本 彦彦 (27・28)
真部 孝一 (27・28)
結城 貞夫 (27・28)
小椋 一夫 (27・28)
坂詰 正夫 (28・29)
鈴木 義樹 (28・29)
望月 知林 (28・29)
丸山 富美男 (29・30)
麓 高生 (29・30)
安藤 義生 (29・30)
田嶋 文義 (29・30)
寺崎 哲郎 (29・30)
関 哲男 (29・30)
杉山 良茂 (30・31)
内田 直夫 (30・31)
道見 利夫 (30・31)
角田 義廣 (30・31)
渡部 浩司 (31・32)
市橋 悟 (34・35)
朴英 憲 (34・35)
平井 千枝 (34・35)

吉野 洋一 (35)
横田 晋朗 (35)
鈴木 肇 (35)
御供 紀肇 (35・36)
市川 紀子 (35・36)
小沢 文郎 (36)
三浦 不二夫 (36)
山本 満 (36)
高山 菊平 (36)
高田 正剛 (36・37)
坂口 宣照 (37)
小石川 良雄 (37)
大西 武司 (37)
小川 邦昭 (38)
谷崎 昭昭 (39)
内藤 正昭 (39)
栗山 康雄 (39)
荒木 康子 (39・40)
佐野 勝己 (39・40)
田中 義人 (40)
浅見 元 (40)
小出 博 (40)
土屋 忠得 (40・41)
柴田 正 (41)
上田 定義 (41)
荻野 肇 (41)
佐久間 隆夫 (41)
中山 義昭 (41)
雨角 勇 (42)
土屋 貞明 (42)
小早川 隆義 (42)
瀬村 隆治 (42)
宮澤 愛子 (42)
浪川 昭雄 (42)
田中 雄二 (43)
林孝 二 (43)

影山 貴美枝 (43・44)
山口 良児 (43・44)
吉田 力 (44)
野際 重治 (44)
長倉 幸次 (44)
相田 信次 (44)
松子 敬子 (44)
金子 美知子 (44)
鈴木 正八 (44)
鈴木 義之 (45)
浜田 利幸 (45)
菅野 良光 (45)
前山 良明 (45)
久保田 博 (45)
深井 富雄 (45)
早川 清文 (45)
山田 緑 (46)
河田 哲 (46)
加藤 久貴 (46)
望月 和衛 (46)
江本 勝 (46)
秋山 稔明 (46)
山口 茂野 (46)
山野 和代 (46)
牧野 千枝子 (46)
石井 千枝子 (46)
前田 正丈 (47)
藤本 哲雄 (47)
野田 栄 (47)
秋山 紀子 (47)
丸山 晴美 (47)
久幸 克宏 (48)
瀬川 宏 (48)

日本大学三島同窓会員数一覧

予 科

期 別	文 科	理 科	計
予科1	49		49
予科2	61		61
予科3	278	90	368
予科4	384	273	657
予科5	508	309	817
計	1,280	672	1,952

- ①「予科1」は昭和21年開設時、東京から三島校舎へ移った3年生。「予科2」は同じく2年生。
 ②「予科3」は昭和21年開設時の新入生で昭和24年3月、3年修了。
 ③「予科4」は昭和22年の新入生、新制大学の発足により昭和24年3月、2年修了。理科は東京移行、文科の一部は予科のみで修了したもの、芸術学部等へ移行したもの等いるが大半は新制大学、法・文・経済学部の2年生として三島教養部へ進む。(下表1期生)。
 ④「予科5」は昭和23年の新入生、新制大学の発足により昭和24年3月予科1年修了。一部は予科のみで修了したもの、芸術学部へ移行したもの等いるが大半は新制大学、法・文・経済・工学部1年生として三島教養部へ進む。(下表2期生)。なお下表2期生の中には新制高校より新たに入学してきたものもいる。

期 別	教 養 課 程								短 期 大 学 部									
	移行 年度	法	文理 (文)	経済	商	理工 (工)	岩手 医進	計	卒業 年度	文 科		商 経 科		家 政 科		工 科		計
										国文	英文	一部	二部	家政	食栄 (栄養)	建築	機械	
1	24	129	14	110				253	24									
2	24.25	161	20	174		356		711	25									
3	25.26	72	15	80		278		445	26			16	37					53
4	26.27	134	31	251		465		881	27			21	57					78
5	27.28	237	93	314		750		1,394	28			27	55					82
6	28.29	332	99	322		594		1,347	29			26	43					69
7	29.30	453	173	433		323		1,382	30			14	42					56
8	30.31	304	213	287		249	53	1,106	31			11	28					39
9	31.32	298	100	357	83	338	55	1,231	32			24	20					44
10	32.33	265	33	362	243	361	73	1,337	33				29					29
11	33	159	72	201	164	220	73	889	34				24					24
12	34	270	46	277	225	170	67	1,055	35				28		58			86
13	35	338	39	253	219	175	70	1,094	36				38		74			112
14	36	425	67	291	250	162	70	1,265	37				47		55			102
15	37	364	85	314	370	174	84	1,391	38				62	30	97			189
16	38	391	88	457	469	76	81	1,562	39				100	46	85			231
17	39	505	82	420	500	63	72	1,642	40			35	84	25	67	50	32	293
18	40	495	99	500	195	97		1,386	41			62	89	52	95	98	69	465
19	41	473	136	626	240	114		1,589	42	70	56	49	78	107	119	101	77	657
20	42	543	161	616	508	64		1,892	43	47	42	118	57	78	157	129	72	700
21	43.44	589	133	615	321			1,658	44	61	51	123	78	73	149	112	92	739
22	44	303	49	340	89			781	45	41	34	118	60	29	79	88	46	495
23	45	415	94	359	128			996	46	58	47	209	76	49	113	152	79	783
24	46	466	148	479	169			1,262	47	75	73	242	69	57	107	169	110	902
25	47	612	146	942	198			1,898	48	82	78	210	69	58	112	166	98	873
26	48	423	144	796	219			1,582	49	101	95	321	70	81	152	171	101	1,092
27	49	526	135	857	265			1,783										
計		9,682	2,515	11,033	4,855	5,029	698	33,812		535	476	1,626	1,340	685	1,519	1,236	776	8,193

- ① 1期～9期 法・経済2年間在学、文・工1年間在学のため同級生であっても移行年度が異なる。
 ② 11期～17期 岩手のみ移行年度が1年おくれる。(表には未記入)
 ③ 21期 学園紛争のため法(新聞)・文理以外は44年に移行。
 ④ 予科・教養・短大を併せた合計会員数 43,957名

昭和49年度事業報告

奨学金給付並びに同窓会長賞授与

(昭和49年度在学生より)

奨 学 金 1名

高 藤 省 三(法学部)

同窓会長賞 6名(短大より)

伊 出 博 美(国文) 長 井 裕 子(商経一部)

山 口 康 子(家政) 天 野 寿 一(建築)

芹 沢 恵 子(食栄) 加 藤 博 昭(商経二部)

学 園 歌 集

3,000部(8頁)発行し、5月新入生に配布した。

会 報 発 行

会報第4号は11月3日に5,000部を発行した。

総会並びに懇親会

11月3日 15時より、総会並びに懇親会を日本大学文理学部三島校舎記念館で行なった。

同窓生 156名出席

議 事 ①前年度事業報告

②前年度決算報告

③49年度事業計画について④49年度予算について

⑤役員改選

⑥その他

昭和49年度収支決算書

(昭和49年4月1日～昭和50年3月31日)

(単位 円)

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
奨 学 金 (表彰記念品代6名)	21,600	会 費 収 入 (500円×3,085名)	1,542,500
学 園 歌 集 発 行 費	662,000	利 息 収 入	441,765
同 窓 会 報 発 行 費 (第4号)	99,000		
各 科 同 窓 会 補 助 費	95,000		
総 会 並 び に 懇 親 会 費	113,600		
会 議 会 合 費	34,070		
通 信 運 搬 費	15,280		
雑 費 (消耗品・旅費・慶弔・雑費)	9,200		
予 備 費	0		
計	1,049,750	計	1,984,265
基 金 繰 入 額	900,000	基 金 取 崩 額	0
次 年 度 繰 越 金	179,719	前 年 度 繰 越 金	145,204
合 計	2,129,469	合 計	2,129,469

貸 借 対 照 表

(昭和50年3月31日現在)

(単位 円)

借 方		貸 方	
項 目	金 額	項 目	金 額
普 通 預 金	1,037,719	基 金	7,200,000
定 期 預 金	7,000,000	前 年 度 繰 越 額	6,300,000
		本 年 度 繰 入 額	900,000
		前 受 金 (50年度会費)	658,000
		次 年 度 繰 越 金	179,719
合 計	8,037,719	合 計	8,037,719

昭和50年度事業計画

奨学金給付並びに同窓会長賞授与

昭和51年3月卒業・移行するものを対象として行なう。
教養課程（法・経・商・文理）……各1名宛奨学金
短大各科（専攻別）……1名宛奨学金または同窓会長賞

学園歌集発行

学園歌のみとし昭和50年度三島学園新入生に配布する。
校歌・学園讃歌など19首の学園歌を36頁に収め、5,000部を
発行する。

会報発行

会報第5号（7月下旬）発行 8頁

会報第6号（11月上旬）発行 8頁

名簿発行

期別・科別に発行することとし、本年は家政科・文科を分冊
形式で発行する。

基本原簿を作成する。

総会並びに懇親会

11月3日 15時より総会、引続いて懇親会を開催する。

幹事会

7月2日 18時より、日本大学文理学部（三島）本館3階小
会議室で開催する。

昭和50年度収支予算書

（昭和50年4月1日～昭和51年3月31日）

（単位 円）

支 出		収 入	
項 目	金 額	項 目	金 額
奨学費(30,000円×4名5,000円×10名)	170,000	会費収入(500円×3,100名)	1,550,000
学園歌集発行費	200,000	利息収入	500,000
同窓会報発行費(2回)	220,000		
各科同窓会補助費 (名簿発行補助費を含む)	510,000		
総会並びに懇親会費	150,000		
会議会合費	80,000		
通信運搬費	60,000		
事務費	50,000		
雑費(消耗品・旅費・慶弔・雑費)	70,000		
予備費	150,000		
計	1,660,000	計	2,050,000
基金繰入額	400,000	基金取崩額	0
次年度繰越金	169,719	前年度繰越金	179,719
合 計	2,229,719	合 計	2,229,719

名簿作成方法について

1. 名簿作成のため原簿（誰が会員であるかの氏名を大学の原簿より確認する）を事務局で整備する。
2. 発行は全体を一つにまとめたものは費用、編集の点でむずかしいので、期別・短大科別にする。
3. 発行を希望する期・科は、それぞれ住所の確認と編集を行なう。
4. 印刷、発行に際しては印刷費を何割か補助する。



苦学生のところ

芹 沢 孝 雄

大学を出て二十有余年の歳月が経過すると在学中の自らをふり返り、自らの心が懐しい思い出に満たされる。自分が大学で何をなしたかを考えていたかを考えさせられる。ふり返れば大学では、物の考え方、人生観、イデオロギーなど将来の自己の生き方について、根本的なものが植えつけられたのではないかと思う。大学では法律・経済・化学・工学等の技術教育がなされるが、それはやはり各人の物の考え方にとって運用されなければならぬ。如何に優秀な技術であってもそれを運用する者の人柄によって、社会に貢献しないこ

とが屢々あるからである。技術は大学を終え社会に出て学ぶことができるが、基礎的な物の考え方は大学に於いて築き上げられるのではないかと思う。

私は昭和二十六年四月から昭和二十八年三月まで三島短期大学商経科第二部に在学していた。当時は今と異なり、アルバイトをして学費をかせぎ昼間の大学を出るということができない時代であった。私は学校の近くの法律事務所事務員として勤務しながら学校の夜間部に通っていたのである。学校では一学年一〇〇人程度のものであった。冬は寒さにふるえ、

夏は居眠りをこらえながら一生懸命先生の講義を聞き、能うる限り読書をしたものである。学友は皆働きながら、学校に通う所謂苦学生であった。先生も私共の心を察して東京からわざわざ三島にきて夜間講義をして下さった。あの頃の先生や学友に会うとかつて同じ境遇にあったが故に言葉を取交わさずともその気持が察せられる。この時期働きながら学んで植えつけた私の同胞に対する愛は、今日に於いても私の考え方の基礎にあるのではないかと思う。

私は、三島短期大学商経科第二部を卒業後上京し、日本大学法学部法律学科第一部三年に転入学した。私は夜学に通ってまで勉強したのであるから昼間部に入ってから、昼夜をわかつた法律の勉強をした。

毎日先生の講義を聞き、研究室で研究し、研究生と討論をし、司法試験の合格を目ざして学んだ。幸い私は在学中に司法試験に合格し二年間の修習を終え、弁護士となり現在に至っている。かつての日本大学法学部は優秀な学生が多く幾多の高等文官試験及び司法試験合格者を輩出させた。東京の弁護士会に於いても著名な弁護士が多く、その点私は幸せである。

現在多忙な毎日を送りながらその間ふと思うことはやはり三島校舎で学んでいた頃のことである。

(昭26・27在学 弁護士)

思えば短期大学部文科を卒業して七年が過ぎようとしております。昨年五月、それまでのんびりしていた二人暮らしに女児が加わり、この新しい生活に慣れるのに親も子も悪戦苦闘の連続でした。

生まれればかりの子供の世話以前に考えていたよりずっとたいへんで、初めの三か月程は外で子供連れの人に出会うと誰彼なしに自分と較べてはるかに偉大に見えるものでした。親の苦勞は自分が子供を持って初めて知るといいますが、ほんとうにその通りなのです。そんな時、きまって思い出すのは短大二年の秋に行なった教育実習の体験です。教えを受ける側から教える側への立場の変化、この時の気持と子から親への現在の気持と何か同様に思えるのです。教える側のたいへんなことを身にしみて感じた私たちは実習の後、多少講義中の態度がよくなっていたのではないでしようか。それと同時に担任の水島先生の話された「私が担任として、いかにあなた方のことを心配しようとも、ご両親のあなた方をおもう心には及ばない。」との言葉の意味が、この頃ようやくわかってきた私です。



鬼軍曹も一児のパパ

中 山 義 昭

約二か月前に『第一回工科機械科同窓会』が開かれました。これがあると七年ぶりだったんです。こんなに長い間逢わないでいたのに『ヤー』『オー』と言う言葉

『初春の朝、藍色の夏、寂寥の秋、権化の冬……』と言う文章を見て『学生会誌』で見た事があると思う人がいると思います。そうですこの文章は会誌の編集後記に書いた文章です。この文章こそ二年間を鬼軍曹でならした私が、学生時代を一言でいい表わした言葉だと思つて、いつまでも心のささえとしています。

学生時代鬼軍曹でならした私も家に帰れば『一児のパパ』なのですから、かわればかわったもので

すネ。こんな私も出張出張で追いまくられている毎日です。出張から帰つて来ると、皇太子(子供)が



この頃思うこと

大 島 恵 子

これも二年間いた学生時代の堅い友情の輪が、いまだに強く結ばれている印だと思つております。(高橋先生、秋山先生、星野先生の御出席もありました。)

この二月で満九か月になった子供の世話にかかりきりの私のとこ

ろへ、この原稿の依頼がまいりました。

三島学園に関する思い出は希望の森、思索の森や、緑の芝生のごとく広がってまいりますが、今日は現在の私の生活に最も身近なものを綴らせていただきました。

(昭41・42在学 主婦)

食 栄 の 思 い 出

秋 山 紀 子

「急げ！ 急げ！ あと三分。」
授業中には器用にも講義を聞き、レポートも作成し、更に鏡を覗き込む。そして10分の休憩時間を最大限に利用して、次の授業にとハイヒールの音高く走りながらの食物栄養の会話はいつもこんな風。それでも時々横道にそれて食堂へ。視線もそれて、キャンパス上のファッションを物色する。そして一日が終ってしまいかと思うとそうではない。またもや我々の行動は続くのである。これも授業の一端であるといわんばかりの顔をして歩き回ったあけく、一つの教

室(?)へ入り、メニューを開くのだ。ここで某女史は言う。「これは約〇〇カロリーね。」「値段も〇〇円位であるわ。とすると〇〇円の儲けね。」「さすが食栄、言うことが違うと店主は苦笑さみ。ところがである。校外実習に出ると一変してしまう。爪も髪もそして顔も、どこにみんな真剣な表情を隠していたのか。山と積まれた野菜や肉も、包丁の音軽やかにトントんと捌かれ、それは気持ちのよいくらい見事だ。(いつも傷薬と包帯持参でなければという慎重な方もたまにはみられたが、

...)。また、現場の栄養士さんへの質問もメモ帳片手に盲点をついてかなり意欲的。それでもやばい問題点や不満な点が残って皆で話し合ったり。こう考えていくとまさにこのバイタリティーは授業中に培われたもの、そして食べ歩きの結果ともいえよう。
「急げ！ 急げ！ あと三分。」
今でも食栄には、こんな話し声が聞こえているのでは……ふとそんなことを思う。

(昭和48・49在学
日本大学三島教務課)

桜 栄 会 だ よ り (家政科同窓会)

本年度は二三三名(第十五期生)を新しく会員に迎え、総数二、一九四名となりいよいよ本会も世帯が大きくなってまいりました。

私たちが日頃「慈母」と仰いでいた岩田せき先生が、このたび定年で退職されました。先生は家政科(家政専攻)創設時からいらっしやいましたので、本会としても大変残念な気がいたします。先生は現在非常勤で週二回出講されておられます。

第十五回桜栄会総会並びに親睦会が去る三月二十三日午後一時から、三島のレストラン「じゅん」において開催されました。この日

出席者会員百余名、恩師七名。平井会長の新入会員歓迎の挨拶に始まり、入会記念品贈呈、謝辞と続いたあと、岩田せき先生に、御退任を記念してつばきの樹が贈られました。山本偉一家政科長の挨拶のあと、「私の生涯において今日のことは忘れられません。」と涙

ながらに語られた岩田先生のお言葉は印象的でした。会は盛り上がりを見せ、自慢のものを聞かせるものもあって、時の移ろいを忘れさせたほど。「学生時代」を合唱して散会したときには、夕日が空をわずかに染めておりました。
次の同窓会誌「桜栄会報第十一号」は来年三月に発行されます。会員の皆様の中で何かニュースがありましたら編集部にお寄せ下さい。

桜 文 会 だ よ り (文科同窓会)

時候の挨拶に、人々が桜花のはころび加減を話題とする頃合ともなると、文科同窓会である桜文会

は総会の開催期を迎えます。発足以来六年目の第六回同窓会総会並びに懇親会は、例年のよう

に三月二十一日、文科の諸先生方とともに、今回日本大学三島同窓会の奥田吉郎副会長、瀬川一男事務局長の御臨席も賜わって田代グレルにおいて開会されました。
会中は中島みほ子さんの挨拶に始まり、内山一也先生の御祝辞に続いて奥田氏からもお言葉をいただいた後、新会員を代表して喜多啓子(英文八期)さんに記念品が贈呈され、これに答えて加藤佳世子(国文八期)さんより謝辞と抱負が述べられました。次に岩城之徳先生の音頭で祝杯が高々と掲げられ、いっせいに乾されると、和やかな卓を囲みでの歓談会に移りました。
この日出席した同窓生は、先輩・朋輩後輩の別なく、同じく恩師の前にそれぞれ学生と呼ばれていた時分の、自由な日々の懐かしい記憶をたどりながら、次々に語られる先生方の近況に一緒に耳を傾け、また自身の生活なども報告し合うなど、ひさびさの友達と旧交をあたためたり、おしゃべり

に余念がありません。こうしてこの二時間半余りにわたる総会並びに懇親会は、名残り惜しいまま終了致しました。それぞれお持ち帰りいただく会誌「桜文」に今回の思い出もまとめて、次の総会を心待ちにしていたきたく存じます。



桜文第六回総会